

平成 24 年
11 月 1 日

病害虫発生予報 11月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

農薬を使用する際は、必ずラベルを確認し、
周辺状況を考慮して使用しましょう。

< 目次 >

. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ：うどんこ病，ハダニ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

【その他情報】イチゴの萎黄病について・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

レタス：菌核病・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

【その他の病害虫】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

ナシ，イチゴ，促成ピーマン，秋冬ハクサイ，レタス，秋冬ネギ，共通害虫

【防除所レポート】

近年発生が目立つ水稻害虫 - イネドロオイムシ，クモヘリカメムシ - ・・・・・・・・ 4

ブドウ主要病害の特徴と本年の発生状況・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

本文に記載されている薬剤は平成 24 年 10 月 24 日現在のものです。
最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

・ 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. うどんこ病

【予報内容】

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

【予報の根拠】

10月下旬現在、発病葉率は平年より高く(本年値9.8%、平年値5.7%、過去11年中2位)、発生地点率は平年並である。発生程度は圃場による差が大きい。気象予報によると、向こう1か月の日照時間は平年より少ないと予想され、発生を助長する条件である。

【防除上注意すべき事項】

発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して処分する。薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、系統の異なる薬剤を散布する。
発病の予防には、硫黄のくん煙処理が省力的で有効である。
ミツバチ導入及び天敵放飼後の薬剤防除は、ミツバチ及び天敵への影響に十分注意する。

2. ハダニ類

【予報内容】

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

【予報の根拠】

10月下旬現在、寄生葉率(本年値8.6%、平年値2.3%、過去5年中1位)、被害葉率(本年値11.8%、平年値3.4%、過去11年中1位)ともに平年より高く、発生地点率は平年よりやや高い。

【防除上注意すべき事項】

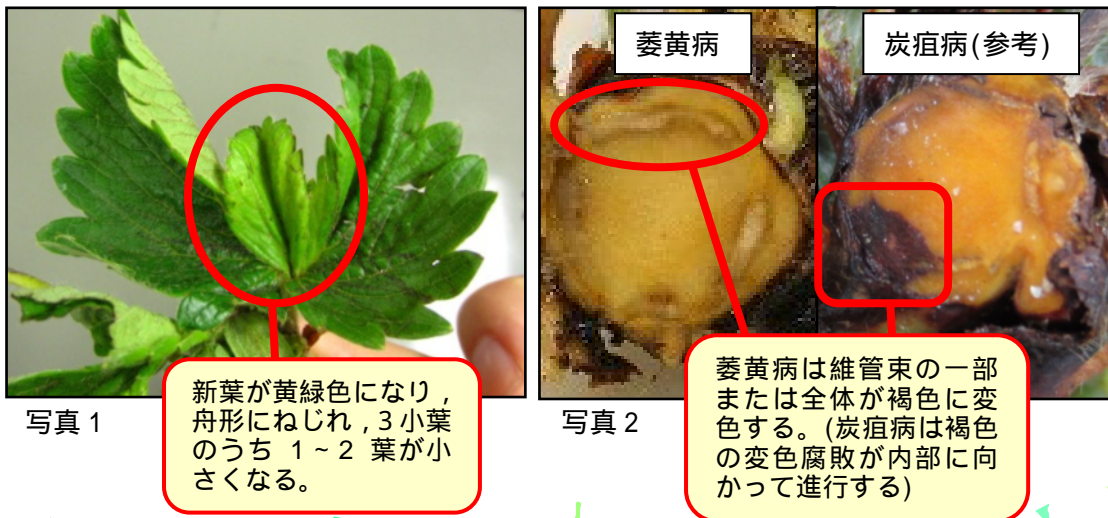
ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。特にビニール被覆後は発生が増加するので注意する。
薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、同一薬剤の連用を避ける。
ミツバチ導入後は、ミツバチに影響する薬剤もあるので、十分注意する。
天敵農薬としてミヤコカブリダニ剤やチリカブリダニ剤を使用する場合、ハダニ類の生息密度が高いハウスでは、薬剤防除で生息密度を下げた後から放飼する。また、天敵放飼後の薬剤防除は天敵への影響に十分注意する。

イチゴの萎黄病について

イチゴの萎黄病が例年より多く確認されている。イチゴの萎黄病の病原菌はフザリウム属菌(カビの一種)であり、イチゴの根から感染する。土壌伝染と苗伝染によって拡がり、発病後の薬剤による防除対策はない。

発病すると、新葉が黄緑色になり、舟形にねじれ、3小葉のうち1~2葉が小さくなる(写真1)。また、クラウン部を切断すると、維管束の一部または全体が褐色に変色する(写真2)。

発病株は見つけ次第ただちに抜き取り、圃場外に持ち出して腐熟化させる等適切に処分する。今作で発病が多かった圃場では、来作の土壌消毒を徹底する。



レタス

1. 菌核病 [予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
-	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

10月下旬現在、発病株率は平年よりやや高く、発生地点率は平年よりやや低い。気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年より少ないと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

菌核病の発生を認めた場合は、菌核が形成する前に発病株を適切に処分する。多発すると防除が困難となるので初期防除を徹底する。また、降雨が続く場合には適宜防除を実施する。薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にも届くよう丁寧に行い、薬剤を散布する際は収穫前日数、使用回数に十分注意する。また、周辺作物等へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意して散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量： -	10月中旬現在，ナシ黒星病（秋型病斑）の発生は平年より多い。落葉は翌年の伝染源となるので，集めて適切に処理する。（平成24年10月23日発表病害虫発生予察注意報第5号参照）
イチゴ	萎黄病	発生量： やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。発病株はただちに抜き取り，適切に処分する。
	炭疽病		
促成ピートマン	ハダニ類	発生量： やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量： やや多い	10月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	白斑病	発生量： 平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
レタス	腐敗病	発生量： 平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬ネギ	べと病	発生量： 平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量： 平年並	10月下旬現在，平年並の発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量： やや多い	10月下旬現在，フェロモントラップへの誘殺数は，土浦市，龍ヶ崎市，筑西市で平年より多い。イチゴでは，平年よりやや多い発生である。

防除所レポート

近年発生が目立つ水稻害虫 イネドロオイムシ、クモヘリカメムシ

1. イネドロオイムシ

巡回調査圃場における6月のイネドロオイムシ幼虫数の年次別の発生推移を見ると、平成18年から増加傾向にある(図1)。また、地域ごとの平年の発生量は、県北地域を除く各地域で多い。本年及び昨年は県南・県西地域で特に発生が多かった(図2)。

被害は例年6月下旬頃に最も激しくなるが、防除対策としては箱施用剤の効果が高い。

2. クモヘリカメムシ

巡回調査圃場における8月のクモヘリカメムシの年次別発生推移を見ると、平成21年からイネドロオイムシと同様に増加傾向にある(図3)。地域ごとの平年の発生量は、県北・県央・鹿行地域で多く、県南・県西地域で少ない。ただし、県南・県西地域でも近年増加傾向が認められるので、今後の発生動向には注意する。昨年は多発年で、ここ10年間で一番多く発生が認められたが、本年も昨年に次いで多い発生であった。特に、県北・鹿行地域で発生が多かった(図4)。

クモヘリカメムシは水稻の出穂期頃に成虫が水田に侵入し、穂を加害しながら産卵する。その後ふ化した幼虫も穂を加害する。特に乳熟期以降は、幼虫密度が高いほど斑点米発生量も多くなるので、幼虫の発生にも注意して適切に防除を行う。

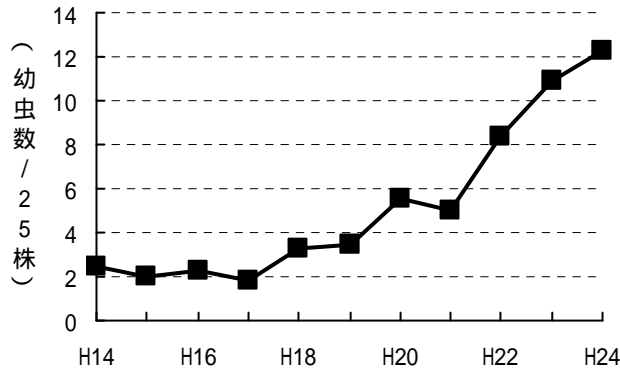


図1 県内におけるイネドロオイムシ幼虫の6月の年次別発生量の推移

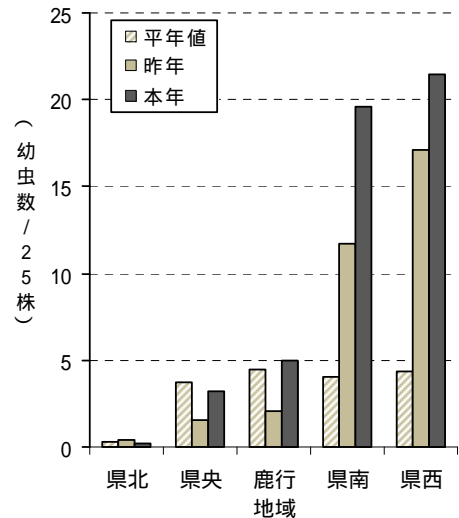


図2 イネドロオイムシの地域別発生状況
注) 平年値は平成14~23年の10年間の平年値。

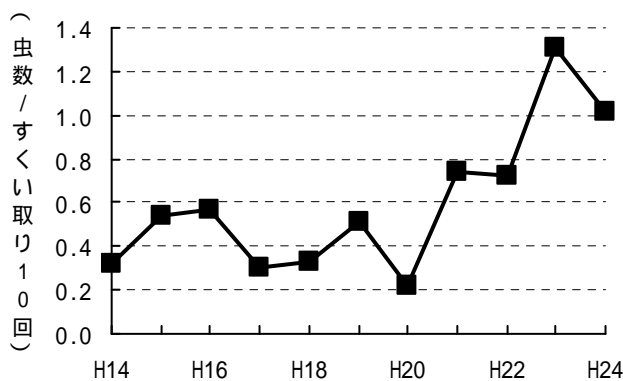


図3 県内におけるクモヘリカメムシの8月の年次別発生量の推移

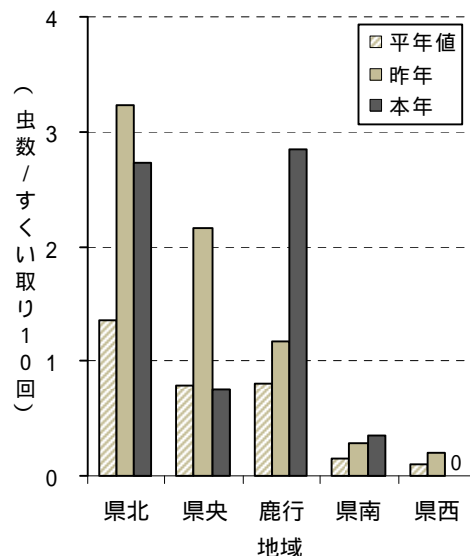


図4 クモヘリカメムシの地域別発生状況
注) 平年値は平成14~23年の10年間の平年値。

防除所レポート [ブドウ主要病害の特徴と本年の発生状況]

ブドウ巡回調査における主な病害の本年の発生状況をまとめました。今後の防除対策も記載したので参考にしてください。

・べと病

主に葉，花穂（果穂）に発病し，白色のカビを生じる。葉に発病すると黄変し発病が激しいと落葉する。また果穂に発病すると果実の肥大が停止し，商品価値が低下する。例年 6 月頃から発生が見られ，その後 9 月にかけて発生が増加する。

本年は 7 月に発生を確認したが，その後の増加は見られず平年よりやや少ない発生であった（図 1）。

・褐斑病

葉に黒褐色の病斑を生じ，発病が激しいと落葉する。例年 7 月頃から発生が見られ，9 月にかけて発生が増加する。

本年は 8 月に発生を確認し，平年よりやや多く推移した（図 2）。

・晩腐病

主に果実に発病する。被害果は表面に鮭肉色の孢子粘塊を生じ，果実に多数のしわが寄り乾燥固化する等，商品価値が低下する。例年 8 月頃から発生が見られ 9 月にかけて発生が増加する。

本年は 9 月に発生を確認し，平年並の発生であった。

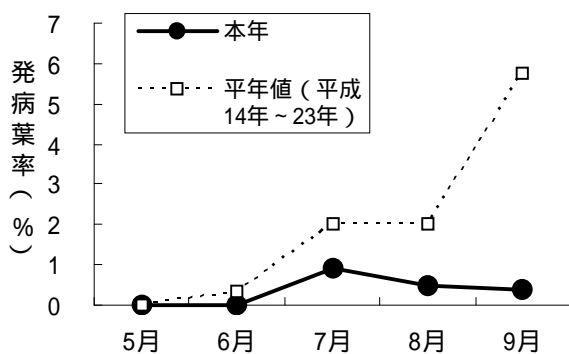


図 1 ブドウべと病の発生推移

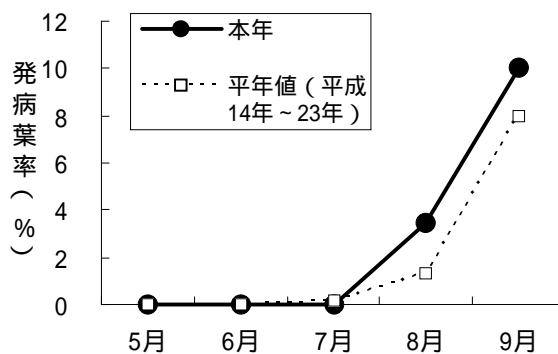


図 2 ブドウ褐斑病の発生推移

[休眠期の防除対策]

罹病した結果母枝や巻きひげ等は，病原菌の越冬場所となるので剪除する。

落葉は，翌年の第一次伝染源となるので，適切に処分する。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 10月27日から11月26日)

気象庁(10月26日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	20	40	40
日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

< 1週目の予報 > 10月27日(土曜日)から11月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 2週目の予報 > 11月3日(土曜日)から11月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

< 3週目から4週目の予報 > 11月10日(土曜日)から11月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。